

「チャットGPT」京滋の大学対応 正しい情報 見抜く力を

同大研究センター 17日にシンポ

「正しい情報を見抜く力を養う観点が欠かれない」と語る同志社大良心理学研究センターの小原センター長(京都市上京区・同大今出川キャンパス)



「チャットGPT」をはじめとした生成AIの大学教育における活用策を考える公開シンポジウムを、同志社大良心理学研究センターが17日に開催する。小原克

博センター長(57)はインタビューで、適切な使い方や正しい情報を見抜く力を養う「AIリテラシー」向上を訴えた。
(聞き手・鈴木雅人)

多くの大学は学生がチャットGPTの回答でリポートを作成することを最も恐れ、国内では使用が発覚すれば厳正に処分すると公表した大学もある。(チャットGPTを開発した企業がある)米国でも各大学が対応を試行錯誤している。

ただ、誰でも利用が可能で、利用者が今後さらに増加することを踏まえれば、使用を禁止することは無理がある。従来の盗用や学生間での回答の共有は比較の見抜けたが、チャットGPTは少なくとも誤字・脱字はなく、減点しづらい回答が返ってくるので見分けることも困難だ。

いたずらに恐れたり禁止したりせず、大学で積極的

に使い、正しい利用法を注意喚起した方がいい。回答の根拠となる情報の真偽や古さも指摘されるが、真偽の見極めはインターネット普及時からの課題だ。文系か理系かを問わずにAIを学ばせ、こった煮の中から正しいと思われる情報を見抜く力「AIリテラシー」を養わせるべきだろう。

1月から研究室の学生らにチャットGPTを体験してもらっている。私が効果的な問いを実演することもあり、調べたいことの答えらしきモノがわずか数秒で出るから学生らはみんな驚く。私は「AIがここまでしてくれるのだから、さらに上を目指しなさい」と伝えている。

質問に基づいて回答してくれる生成AIは確率的

に文章を組み合わせるだけ。質問が一般的なら回答も「ウイキペディア」的な答えにとどまり、正解であっても面白くない。対話する中で条件を加え、確率の範囲を絞り込むほどシャープな回答や気付きが得られる。一言でいえば質問力をいかに高めるかが問われる。

何が問題かをきちんと見抜く質問力が今まさに求められている。単に知識を集めるだけの、AIにまねされることをやっている意味がなく、AIを超える知性の習得がこれからの大学

教育に必要な。

公開シンポジウムは17日午後4時40分から、京都市上京区の同志社大今出川キャンパスで。チャットGPTの解説をはじめ、文系、理系それぞれの分野での実演、チャットGPT搭載の対話型ロボットの披露などを行い、大学教育の新しい展開や留意すべき課題をテーマに小原センター長らが議論する。参加無料、事前申し込み不要。Zoomウェビナーの視聴は同センターのホームページで事前申し込みが必要。12日まで。